

「国も年齢も超えて」を实践！—清華大訪問



(学生たちの合唱) 清華大での交流会で (訪問団の「紅葉/もみじ」輪唱)

アジ風のイメイト会員と清華大学日本語科学生とのメール交流が始まって丸6年、会員が大学を訪問するのは6回目となりました。その絆は年々太く堅固になっていくのを感じます。

6月4日、11名の訪問団はキャンパス内の宿舎で集合し、広いキャンパスを歩いて高井先生の日本語クラスへ。授業参観は「日本社会・労働」というテーマです。あらかじめ知らせてあった会員のキヤリアデータを基に、高井先生がグループ分けをして、会員を学生たちのグループにそれぞれ招き入れました。

学生は会員にインタビューをして、グループごとにまとめた発表をしました。「NPOについて」というテーマのグループに入った上事務局長は、活動資金のこと、アジ風の理念、やりがいなどを尋ねられ、張り切って答えました。

午後は2人の学生のガイドでキャンパスツアーへ。隣接する北京大のキャンパスにも足を伸ばして、優に2時間あまり。(授業参観やキャン

パスツアーの様子は、P2の訪問団团长・小田晋作さんの記事をご覧ください。

夜の交流会は、総勢33名。読後感想文コンテストの表彰式から始まり、「あれも愛なのだ！」で見事一位を獲得した周皓昕さんの感想は、P4のイメイト便りに掲載されています。発表まで結果を知らなかった学生たちは、名前の発表ごとに、「ワーツ」と歓声を上げました。最後に2年間アジ風派遣教師として学生たちを取りまとめてくださった高井先生への感謝の言葉。高井先生がいかに学生たちに信頼されたかは、同じくP4、王錫鉞さんから藤原さんへのメールでうかがえます。また周さんと王さんのメールから、私たちの訪問でさらに理解が深められたように、大変うれいものでした。

訪問団の一員であり、今回の読後感想文の審査員だった伊達和夫さんは、P2の会員紹介に登場。中国の変化を目の当たりにした感想を述べておられます。イメイトの学生と率直に意見交換できたことも印象深かったそうです。



(感謝状を受け取る高井先生)

高井先生への感謝の言葉。高井先生がいかに学生たちに信頼されたかは、同じくP4、王錫鉞さんから藤原さんへのメールでうかがえます。また周さんと王さんのメールから、私たちの訪問でさらに理解が深められたように、大変うれいものでした。

イメイト会員交流会は、別名「多文化共生を学ぶ集い」と称し、年2回、春と秋に行われています。学生とのメール交流の実例を基に、ケーススタディをしたり学びを発表する機会です。

今春はゲストに慶応大学大学院の何芳さん(北京第二外国语学院出身、小田晋作さんの元イメイト学生)を招き、「イメイト交流がもたらしたものと題してこれまでのメール交流や、日本語学習、日本への留学について、出会いの大切さや何芳さんの努力の軌跡を話してもらいました。また清華大からの留学生も数名加わって、学生の立場からの発言があり、大変参考になりました。



(挨拶をする上事務局長)

認定NPO法人 アジ風の新しい風

第28号 2010年 (夏)



(キャンパスツアー 清華門前で)

翌日はミニバスをチャーターして、学生たちと天津バスの中では、秋から日本留学を控えた2年生と、すでに留学体験者との間で情報交換がなされ、日中文化比較が展開されたのも有意義な思い出になりました。

交流校の訪問は、アジ風の活動の中で最も印象深いもののひとつです。未体験の方はぜひ次回ご参加くださるよう、お勧めいたします。来年1月頃タマサート大学訪問を予定しています。



(藤原玲子)

5月15日(土) 留学生の王超さんを含むアジ風会員一行7名は新宿や大宮から電車で東武日光駅に向かいました。五月晴れの中、日光駅で、「NPO森びとプロジェクト」が手配したバスに乗り、一路足尾銅山へ。途中、足尾銅山の歴史から日本の森の現状、「森びとプロジェクト」が行っている森を再生する取り組みが熱く紹介されました。日光の新緑にうっとりしているのもつかの間、足尾に足を踏み入れると景色は一変。赤茶けたはげ山が目の前に現れ、鉱毒がいかに広範囲に広がっていたかを見て驚きました。山では、苗木3本を受け取り、細い急な山道を登り苗木を植えました。

良いお天気だったので、3本植え終わるころには汗びっしょり。私たちが植えた木が無事大きくなって森になるように祈るばかりです。(藤原玲子)

認定NPO法人 アジ風の新しい風

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-18-22-414
TEL/FAX 03-5426-6714
http://www.npo-asia.org new-wind2006@npo-asia.org

Iメイト便り Iメイトって? Internet, 愛, (出)会いのアイ

今回は中国訪問後の交流をご紹介します。中国で藤原ひさ子さんに会った王さんは、メールの中で高井先生への感謝の気持ち、藤原さんとの再会を楽しみにしている素直な気持ちをつづりました。また周さんは訪問団も参加した授業の中で、アジ風のNPO活動への理解を深めてくれました。繊細な感覚をもった周さんは、読後感想文コンテストで、審査員が全員一致で推した感想文を書いて一位になりました。(奥山寿子理事)



藤原ひさ子さんと王錫鉞さん
藤原さん→王さん 6月15日
錫鉞さんは想像した通り、皆のリーダー的存在で、世話好きで、歌も上手で、魅力的な女性でした。カラオケでは、アジ風訪問団の団長の突然の飛び入り参加の手配もテキパキとこなしてくれました。たった1年半習っただけとは思えない達者な日本語に、こちらがたじたじの態度がありました。次の日は早朝からアジ風メンバーを天津観光に案内してくれてお礼を申します。大勢の年寄りを束ねるのは骨の折れることだったでしょう。皆感謝していますよ。

これから錫鉞さんと過ごしたひと時を大切に、ずっと胸に刻んでおきましょう。秋には東京でお会いしましょうね。

王さん→藤原さん 6月27日
三週間前のことを思い出したら、まったく印象に残った断片だけです。ですから私の感想を記録しました。6月4日8時、文南楼116の日本社会授業 国華と天智の「最後」スピーチ。

小さいときからずっと「最後」という言葉が大嫌いだなと思っています。一年生のヒアリング授業から高井先生と知り合いになったからもう一年間半です。そして高井先生のお陰で日八クラスの全員がアジ風と付き合いになってからもう8ヶ月です。ひさ子さんからはじめのメールは2009年10月19日でしたが、24封のメールはずっと一つのファイルに保存しています。一番相応しいところではないんですけど、すぐに遅刻になる高井先生のこと、ここで感謝の気持ちを表したいんです。粗忽な私たちにとっては、一番印象に残った授業は、「真剣な態度で人生に直面しなさい」と教えていただいたということなのです。先生、ぜひぜひ、幸せになりますように。(中略)最後に天津からの高速列車で旅を終えてから、もう三週間前のことか! そういう特別な経験はもう心の深いところに住んでいました。やさしいひさ子さんの顔、ほんとに二度と日本で会いたいかなと思っています。そのとき、待ってまいります。

森郁子さんと周皓昕さん
周さん→森さん 6月5日
今日アジ風の方々と会って充実した一日を送りました。午前中の授業では、会社や就職について質問を提出して相談しました。私のグループは「NPO関係」をテーマにして、上さんにインタビューしました。私はNPOの活動資金について質問しました。もちろんいろいろな形がありますが、アジ風の活動を支える資金は、ほとんど政府や企業に頼らず、会員の寄付金から集められることを今日初めて聞き、びっくりする上、感心して深く印象に残りました。また、NPO活動に寄せる生きがいへの探しと考えるについても聞きました。人間は自分で遊んだりするだけで満足を感じるタイプではなく、他人のために何かをすることこそ人生の価値を作り出して満足する。他人を喜ばせると自分もうれしくなる。上さんはそうおっしゃいました。それは人生のすばらしさだな~と思って共感しました。私もそのような人になりたいと思います。そして、夕方の表彰式。一位をとったのは本当に予想外だったんです! 嬉しくてびっくりしました。ありがとうございました。絶対に皆さんの寄付金で作られた賞金3万円を大切に使います。森さんからの贈り物も大変うれしかったです。お手紙を読んで、私は考えが未熟で経験も浅くて、さまざまな勉強をやるべきだと思います。森さんの言葉を覚えてこれからもがんばります!

森さん→周さん 6月5日
すご〜い! 一位だったんですね! 期待はしていましたが、実際そうなることともうれしくて興奮しますね! 本当におめでとうございます。NPO活動のことを上さんから直接聞いたことは本当に貴重な経験でしたね。そしてその意義をきちんと感じ取ってくれたことに感心しともうれしく思いました。さすが周さんですね! またメールします。うれしくてニコニコしながら。



私の一メイト第1号の李丹さんが5月中旬泊4日に来日しました。李丹さんは北京第二外大から北京外大大学院へ進み昨年主に日本とフランスの本を翻訳出版する会社に就職。今回は出版社の社長、編集長、印刷会社の社長(すべて女性)との出張で、観光は一切なく日本の出版社との版権の交渉、紀伊国屋本店で本の物色でした。私はこのうち2日間お供しましたが、帰国後李丹さんから「これまでフランスびいきで日本にはあまり好感を持っていなかった社長さんが、アジ風のことを知り日本人の親切さを知ってすっかり日本が好きになった」との嬉しい知らせがありました。(新井雅夫)

アジ風事務局から

アジ風の支所として5年間にわたり利用した江戸川事務所は、6月20日をもって閉鎖いたしました。

新事務所は、副都心周辺に探しています。格安で、適当な賃貸の事務所兼住居があれば、ぜひご紹介ください。

New-wind2006@npo-asia.org

アジ風事務局から

「森びとプロジェクト」の呼びかけで足尾銅山での植林を体験しました。その時聞いた話ですが、日本の山はナラや赤松など酸性雨の影響で枯れてきており、再生のために炭を撒く運動をしているとのこと。炭はすばらしい効果があり、食べると人体にも良いそう。政府や政党にも呼び掛けて「炭撒きをして日本の山を元気にしよう」と取り組んでいる森びとプロジェクトに今後とも注目していきたいと思えます。(藤原玲子)

私の一メイト第1号の李丹さんが5月中旬泊4日に来日しました。李丹さんは北京第二外大から北京外大大学院へ進み昨年主に日本とフランスの本を翻訳出版する会社に就職。今回は出版社の社長、編集長、印刷会社の社長(すべて女性)との出張で、観光は一切なく日本の出版社との版権の交渉、紀伊国屋本店で本の物色でした。私はこのうち2日間お供しましたが、帰国後李丹さんから「これまでフランスびいきで日本にはあまり好感を持っていなかった社長さんが、アジ風のことを知り日本人の親切さを知ってすっかり日本が好きになった」との嬉しい知らせがありました。(新井雅夫)

民主党政権が推奨する「新しい公共」という概念は、超党派で受け入れられ、税制の優遇措置(税額控除拡大)が検討されているようだ。約4万のNPO法人のうちわずか150(6月現在)の認定NPO法人は、政府に代わって社会貢献の役割を期待されているという。アジ風はそのうちのひとつ。貧乏な国を憂うべきか、使命感をもって喜ぶべきか。草の根の異文化交流を目指すアジ風にとって「追い風」と受け止めた。

「森びとプロジェクト」の呼びかけで足尾銅山での植林を体験しました。その時聞いた話ですが、日本の山はナラや赤松など酸性雨の影響で枯れてきており、再生のために炭を撒く運動をしているとのこと。炭はすばらしい効果があり、食べると人体にも良いそう。政府や政党にも呼び掛けて「炭撒きをして日本の山を元気にしよう」と取り組んでいる森びとプロジェクトに今後とも注目していきたいと思えます。(藤原玲子)

清華大を5年ぶりに再訪 早い上達に感心 純真で真面目な学生

読書感想文コンテストの表彰式参加のため、5年ぶりに清華大を訪れた。優秀作ぞろいだったコンテストについては、冊子の報告書の方に譲り、ここでは授業参観や学内の様子などについて述べたい。

約2時間の高井先生の授業は、前半が各都道府県の紹介。この日は香川県と鹿児島県について2人の学生がそれぞれ発表した。金国華さんは、香川県の豊島(てしま)で産業廃棄物の投棄が大問題になったことを調べ、また李天智君は明治維新の際、都から遠い薩摩藩の武士達がいかに活躍したかなどについて話した。質疑では、豊島に因連になって、中国でも環境問題が深刻になっていくこと、日本にどういうことを学ぶべきか、などの意見が交わされた。



＜テーブルごとに話合った発表をまとめた＞
都から遠い薩摩藩の武士達がいかに活躍したかなどについて話した。質疑では、豊島に因連になって、中国でも環境問題が深刻になっていくこと、日本にどういうことを学ぶべきか、などの意見が交わされた。

新入社員としての心得や、外国人の待遇などについて聞かれた。まとめの発表によると、女性の労働環境とか、エネルギー関連5年前の授業参観では、「鎌倉時代の衣食住」をテーマに発表をしていたと記憶するが、我々日本人でも十分知らないことについて、よく詳しく調べるものだ。また授業中は日本語オンリーで、2年足らずの間によくこんな流れに話せるようになるものだと、改めて感心させられた。授業は午後9時までの日もあるといい、ほとんどの学生が寮から通う。日本の学生の数倍くらい勉強しているのではないかと。表彰式の後の交流会では、楽器演奏や歌が次々に飛び出し、あつという間に終わってしまった。向こうの学生は実に純真で真面目。欲を言えば、特に男子学生はもう少し覇気があってもいいかな、という気がしないでもなかったが、そのうちたくましくなっていくのだろう。

来百年周年を迎える清華大は米国が作ったせいとか、開放的な作りでキャンパス全体が街になった感じ。ものすごい広さで、学生には自転車が必需品という。訪問団員には、数キロに及ぶ構内ツアーですっかり音(ね)を上げた人もいた。

お世話になった事務局、先生、学生の方々にも多謝。
(iメイト会員 小田晋作さん)

留学生活とアジ風

まもなく、帰国の飛行機に乗ることになる。日本での研修留学生活はあつという間にエピソードを迎える。羽田空港へ通勤して、日本サラリーマンの疲れをたつぷりと味わった前期。早稲田大学に通って、日本大学生生活の自由自在を楽しんだ後期。かなり充実で楽しい一年間だと思ふ。前期の研修でも、後期の留学でも、大きな心の支えになってくれたその一つは、「アジ風」だと言えるだろう。様々な活動を行うことで、アジ風はまるで風のように柔らかに吹き込んで、私たちを優しく包んでいて、激励や支持を与えてくれる。



＜アジ風から初の招待メールを受け、アジ風から初のお披露目を受けた時、日本人と接する良い機会だと楽しく期待しながら、どうなるのかと不安も少し浮かんだ。しかし、結局積極的に参加しようと思ひ活動と優しい皆さんだ。謎の城に入る如く、迷子になりながら、宮崎駿監督の作品の魅力をし

つかり感じた三鷹の森ジブリ美術館の見学。桜の下で輪に座った皆さんは談笑したり歌ったり食事をしたりして、すごく盛り上がった。その熱意はまさに花冷えの寒さを圧倒するほどだった。上野公園でのお花見。また、やや細く険しい山道を上り、手を土まみれにして、山桜や三つ葉を植えた足尾銅山での植林……今振り返ると、まるで昨日のことのように、様々なシーンは次々と頭に浮かんで、気持ちを朗らかにする。交流中、言語の問題はもちろんある。しかし、穏やかな笑みを浮かべてくれたお爺さんお婆さんを前に、何やら緊張や不安は消え去ったような気がした。心を開いて、快く話すことができた。清水さんと藤原さんの家を訪ねた時、自分の家に帰るかのように、その親切さにすごく感動を覚えた。家族から離れていけるが、祖母祖父のような存在が身の回りにいるから、寂しくは思わないね。

アジ風は全日空、早大と共に、過去一年三つのキーワードと言えるかな。楽しい思い出をたくさん作ってくれたアジ風に、「ありがとう」と言いたくて私たちが留学生が誰しも思うことだろう。
(清華大学留学生 王超さん)

人と人との交流

高井曜子先生

最高気温が連日30度を越えていても、空高く葉をつけた校内の並木道を自転車走ると心地よい風が感じられ、ゴロゴロと売られている水分たつぷりのスイカを口にすると元気がわいてくる北京。写真は6月22日に撮影したもので、窓の外は工事中の100周年記念講堂。現在99歳の清華大学です。

6月初めにお越しくださった11人の訪問団の皆様には、2年生一人一人と接していただけたこと、学生ともども感謝いたします。

私自身はこの6月で、中国での7年半、清華での2年の勤務を終えて帰国することになりました。この2年を振り返ると、教室という場で一緒に闘ってくれた学生達が力の源だったことを思います。そして授業だけでなく、アジ風のメール交流の間にいらせていただくという経験からは、海を越えた人と人の交流の温かさ、難しさ、そして大切さを実感させていただきました。

派遣教師の現地報告



＜期末試験直後の2年生17人＞

アジ風のメルアドに心から感謝申し上げます。お詫言いたします。これからの一つ一つの交流が続き、また新たな交流が生まれていくことを祈念いたしております。(中国・清華大学派遣教師)

感謝しつつハノイとお別れ

小林さつき先生

5月8、9日両日に「日本さつき祭り」が行われました。昨年までの「さくら祭り」に代わり実施されたものです。日本からも4団体が参加、本場のよさこいを披露して下さいました。それに負けじとハノイの学生たちも日頃の練習の成果を披露、よさこいの競演を堪能しました。大勢の人が、日本の文化に興味を持ってきていて、胸が熱くなりまして。

時の経つのは早いものです。昨年9月、始めてハノイに来た時はまだ夏真っ盛りで、秋の到来を今か今かと待つ毎日でした。またこうしてハノイを去る時も暑い季節です。その間にも11月中旬には寒波が到来、窓から吹き込む風の冷たさに学生はコートフードを頭から被り、私は教師の日に学生にプレゼントしてもらったスカーフで、寒さを凌ぎながら授業をしたことが思い出されます。また、いつもきらきらと目を輝かせて話を聞いてくれた学生一人一人の顔が浮かんできます。皆が挫折することなく、日本語の勉強を続けてくれることを願ってやみません。何かと手助けをして下さった日本語学部の皆様、VJCCの皆様、ハノイ日本語教師会の皆様、日本語クラブのメンバー、クラスの学生たち、そして暖かく見守って下さった近所の皆様、全ての方々に感謝しつつハノイとお別れです。有難うございました。



＜Giang Vo 展示会場＞

本語学部の皆様、VJCCの皆様、ハノイ日本語教師会の皆様、日本語クラブのメンバー、クラスの学生たち、そして暖かく見守って下さった近所の皆様、全ての方々に感謝しつつハノイとお別れです。有難うございました。

(ベトナム・貿易大学派遣教師)

タマサート大学に着任しました

盛田真規子先生

こんにちは。こちらは6月14日に新学期が始まりました。静かだったキャンパスに大勢の学生が戻り、講義棟はもちろん道路も学生で溢れ返っています。連日、新入生歓迎イベントが様々な所で行なわれています。

ここは以前、田畑以外に何も無い場所でした。バンコクにあるタープラチャンキャンパスでは増えた学生を収容することができなくなり、郊外に新キャンパスを作り、こちらで学部生、バンコクで大学院生をとるように、分けて教育を行なうことになったそうです。ですから、この周りはまだまだ不便で一番近いスーパーでも10キロ以上先の所にあります。

タイ人の先生方は両キャンパスでの授業を担当されていて、多くの先生方はバンコクに住んでいらつしやるため、1、2時間以上かけてこちらへいらつしやいます。私を含め日本人教員は時々バンコクの方で行なわれている土曜日の社会人授業を教えるに行きます。あちらで教える時間よりも往復に時間がかかるため、一日仕事になります。

さて、日本語学科ですが、先月キャンパス内にある東アジア研究所で25周年記念イベントとしてディベート大会がありました。他大学の学生を相手に5年生の学生が健闘しました。これは学内でのスピーチコンテストや中間試験が控えています。ますます忙しくなりますが、頑張りたいと思います。

(タイ・タマサート大学派遣教師)

会員紹介

伊達 和夫 (だてかずお) さん アジ風で社会貢献

「約18年ぶりに訪れた中国・北京が変わっているのに驚いた。笑顔が溢れていました」と、6月4日、読書感想文コンクール表彰式・清華大学訪問団に参加した伊達さんは、開口一番、中国の印象を話した。高層ビルなど都市の発展の様子ではなく、街に行き交う市民の姿に視点があつた。天安門事件(1989年6月4日。6・4と呼ばれる)の数年後に、出張で行った北京には、「笑顔がなく、暗い表情ばかりだった」との思い出が相当強かつたのだろう。さらに、清華大を訪問した日が、奇しくも6・4のその日。「懇親会の席で、清華大の先生が『今日は天安門事件の日です』と堂々とおっしゃったのにも驚かされた。評価について触れたわけではないが、前回の訪中の時は、そのこと自体に触れる雰囲気無かつたのに比べると様変わりでした」との観察眼には敬服した。共産党(の統治)をどう思うか、も学生に聞いてみた。ある学生曰く「この国には共産党は必要です。中国を治めるためには、自由だとバラバラになる。強い指導がないとダメです」との答えに直面した伊達さんは、率直な物言いにまた感心させられたと言ふ。



同大生は朝8時から夜9時までで勉強漬け、だと知らされた。その学生の1人から「日本の企業に入るには成績はどの位必要か」と質問された。伊達さんは「日本の企業は優秀な人ばかりを採用するわけではない。それだと、会社は良くならない。いろいろな人がいて創造性が発揮される、個性を伸ばしなさい、と答えたら、学生たちは、喜んだ表情で、目を輝かせていました」との光景を明かした。厳しい競争社会の中にある学生たちの姿は「疲れているようにも見えた」との感想。

引退後、伊達さんは多趣味の生活。ゴルフ週1、ジョギング、山登り、テニス週2、碁、家庭菜園と、忙しい。「こんな遊びばかりで良いのか」と疑問を抱いていた時、アジ風を知り、「何か社会貢献できることにも」と、昨年暮に入会。「会員の皆さんの純粋で熱心な姿に圧倒されています」とアジ風の活動に感動、共鳴していました。
(インタビュアー 正会員 園木宏志)

ベトナムの若者は未来志向!

増本純子さん

「ベトナムは若い国。私達が国を作っていくのです。」貿易大学訪問ツアーの際に聞いた学生の言葉が、今でも耳を離れません。新聞には「日本の対ベトナム直接投資09年約1億4千万ドル。今年5月末11億ドル突破」と。未来に希望を持ちエネルギーに満ち溢れている今のベトナムに、アジ風の派遣教員として行けることを光榮に思っています。アジ風の風を大切に膨らませながら、精いっぱい頑張りたいと思います。宜しくお願ひ致します。



玉川大学文学部教育学科 卒業
神奈川県川崎市立小学校6校に勤務
朝日カルチャーセンター日本語教師養成講座全課程修了
東京国際文化学院横浜校日本語非常勤講師として勤務

アジ風の北京事務所長のつもりで

吉田明さん



「おかげさまで、日本がますます好きになりました。もつと、日本語が上手になりたい」こんなふうにいわれると、面映ゆい。さしたる愛国者でもないのに、なおさらである。

縁あって、3月から北京の清華大学外国語学部で日本語を教えている。授業から3カ月ほどたつてから、生徒に感想や注文を書いてもらった。新米教師へのご祝儀もあつたか、好意的な内容が多くほつとしていた。

しかし、日本語教師の心得を学んだことはない。格助詞の違いを論理だてて説明することもできない。先輩諸氏に学ぶべきこと多くある。定年近くまで、朝日新聞に籍を置き、おもに社会部畑で記事を書いた。政治や経済という視点ではなく、市民の目線で中国との付き合いを続けている。

そして「アジ風」の北京事務所長として、みなさんとお付き合いも始まった。「iメイト」のメンバー発掘など交流活動のお手伝いをするようになる。日本は、そんなに悪い国じゃないぞ、こんなふうにいる若者が一人でも増えればと願っている。